

吾人は之を聞く、ピットの妹曾て英國の教育を痛撃して「余は教育を嫌ふ、何とあれば人をして器械の如く一樣をらしむ」と云へりとかや。此言矯激なりと雖も是れ亦た世の政略的教育家頭上の一針たらざるばあらず。

雜 錄

時 文 摘 話 (第三)

助教授 黒 本 植

○何々トイヘドモ、シカレドモ云といふ事

「イヘトモ」といふ詞は「イフ」といふ詞の第五階を用ひて、これに、「ドモ」の接續詞をつけたるあり、「シカレトモ」は「シカリ」といふ詞の第五階を用ひて、これに、「ドモ」の接續詞を加へたる者にして、何れも、轉接詞あり、されは、「イヘドモ」といへは、「シカレドモ」といふにや及ふ、「シカレドモ」を下にわかは、上の「イヘドモ」は、削りて可あらん、然るよ、今日の新聞などを見るに、この二語を並用するは、別に何といふ見解もなく、只漢文よみの重習、白首に至るまでうせざるあるへし、今一二例をわけんに、

雖_レ美_レ而_レ不_レ彰、雖_レ盛_レ而_レ不_レ傳、

善人雖_レ多_レ而_レ不_レ厭也、

更_レに然_レの字を用ひたる例をあげば、

清濁雖_レ不_レ同、然_レ不_レ以_レ濁者不_レ爲_レ水也

夫れ、漢文には、雖の字、上にほりて、下に又、而、或は然の字を加ふる、是も、別に意あるにあらす、只るの語勢の緩急によりて、これを加ふるあり、故に而、或は然の字を加へざる文も、亦いと多かり、今おれを省きてよますとも、何の差支もなきとされども、どかく、讀まねばあらぬこと思ふより、終に文をかくにも、かくは重ぬるなり、只用なきのみならず、詞の重複をふし、齒舌の煩にたへざるあり、尤、會話上には、この重複を許すと、往々これあり、例へは、「ソレハ、ソウナレドモ、併シナガラ」あといふ類あり、然れども、文章には、この冗語を用ふるとは、許さざるもの、とまざるへま、その用をければあり、これらは、聊、言文の異なる所あり、

さて、是に就きて、更み漢字の雖の字の訓義をいはん、この字は、古より「イヘトモ」と訓すれども、この一訓に限るへき字にあらす、(只「イフ」といふ動詞の下に、「ドモ」の接續詞をつけたるやうの意に通へる所ある故よ、「イヘトモ」とは、訓じたるのみ)、その証は、左の例にしてしるへま、

淮海長鯨ハトモイヘタタリトナ雖レ授レ首襄陽短狐未ニ全革ク面ナ

是れを譯つして「淮海ノ長鯨ハ首ヲ授ケタリト云フトイヘトモ」といひては、「イフ」といふ詞、重複するあり、是は、全く「ドモ」と訓すへきにて即、漢字の本義あり、故に、古訓よは、雖の字を、「ド」「ドモ」「トモ」の詞よあてたるとは、萬葉集をよに、いと多かり、その一を引かは、

難波人葦火燎屋之ナニハヒトアシヒダクヤノ醉ス四手雖有テ已妻許增常目ツシミヤガシキ類次吉

あどの類あり、さるを、今の人は、雖の字さへあれば、「イヘトモ」といふより外に、讀方のなき字のやうにれもうが、第一、誤の生ずる原因あり、弁せざるへからす、蓋、漢文にては、時の過去未來、事の虚實よかへはらす、雖の字を使ふとされども、我か邦語にては、その時の過去未來、事の虚實によりて、

その訓、異なるあり、卽、實には「ドモ」を用ひ、虚には「トモ」を用ふ、たとへば、言、爲の二字をもていは、實に人の言ひしと、或は爲^セとを承けて、その意を轉する時は「イヘドモ」「スレドモ」といひ、假よ定めていふ時は「イフトモ」「ストモ」といふが格式あり、下に眞字伊勢物語をひきて、その譯法を示すへし、

カニシノクイニキチ^{カニシノクイニキチ} マチチ^{マチチ} ミイチ^{ミイチ}、ミレドコソニ^{ミレドコソニ} ニルヘクモ^{ニルヘクモ} アラス
彼西對爾往而立而見出雖見去年爾可似毛不有
ヒトシケクモ^{ヒトシケクモ} アラテ^{アラテ} タヒ^{タヒ} カサナリケレ^{カサナリケレ}
人集雖不有每重計禮者

右は「ド」といふ詞にあてたるあり、

アナヤト^{アナヤト} イヒケレトモ^{イヒケレトモ} カミナルサワキニ^{カミナルサワキニ} キカサリケレ^{キカサリケレ}
穴哉常雖云神鳴騷爾得不聞計利

アシスリナシ^{アシスリナシ} テ^テ ナケドモ^{ナケドモ} カヒ^{カヒ} ナン^{ナン}
足摺乎師傳雖哭甲斐無

右は「トモ」といふ詞にあてたるあり、

以上は何れも實を承けてその意を轉したるにて過去に属するあり

ワスルナヨ^{ワスルナヨ} ホム^{ホム} クモ井^{クモ井} ニ^ニ ナグストモ^{ナグストモ} フラケツキ^{フラケツキ} メケリアフマ^{メケリアフマ} テ^テ
忘諾余期者雲井爾雖將成空行月廻廻會左右手

ケフコズ^{ケフコズ} アスハ^{アスハ} ユキトソ^{ユキトソ} フリナ^{フリナ} マシキエス^{マシキエス} スアリトモ^{スアリトモ} ハナミヤマシヤ^{ハナミヤマシヤ}
今不來者明者雪與社歷諾勝不消者雖有花可見哉

右は「トモ」といふ詞にあてたるあり、

以上は皆、假に定めていひたるにて未來に属するあり、

凡て、國語は、時の過去未來、事の虚實を分つと、極めて嚴密なれば、今漢文を讀むにも、譯して用ふるにも、この別なかるへからず、卽上文にゆけたる、「雖盛而不彰」の句は、假定していひたる所の雖の字なれば、未來の詞を用ひて、「盛ナリトモ彰ハレシ」といふへきあり、「雖善人多而不厭也」の句は、實事

をうけて、いひたる所の雖の字なれば、過去の詞を用ひて、「善人多カレトモ厭ハサレハナリ」といふへきあり、これを要するに、雖の字は、「トモ」ともいふとあり、「ドモ」ともいふとあるあり、漢文をうつす時は、この區別を忘るへからず、かの佐藤點の四書には、古訓のやうに、往々「ドモ」との點したる所あり、是は、佐藤點にまては珍しきとあり、今人は佐藤點にも知らぬ讀方をまて、いつれも「美ナリトイヘトモ」「多シトイヘトモ」などやうにいふ、抑うの言ふとは、何人のいひけるをうけて、これを轉したるや、人か、已か、主格もおかすして、「イヘトモ」といふへきとかは、よく／＼心すへま、

○何々ノ如クシカリといふ事

漢文に

如レ見ニ其肺肝_ナ然

東ニ縛之ニ馳ニ驟之ニ若ニ牛馬ニ然

非レ若ニ馬牛犬豕豺狼麋鹿ニ然

譬若ニ禽獸ニ然

かやうの句法、いと多し、今時の文に、之を書下しにして、「其ノ肺肝ヲ見ルカ如クシカリ」とやうに、かけると、常なり、一体、漢文の語格にては、釋詞よ、「然、狀、事之詞也」とあり、又「然猶レ焉」_{コトニ}ともありて、即、轉語よ用ふる外に、形容詞と助辭との二様あり、と心はて可なり、今、上にあげたる然の字とは、按ふに、いはゆる事を狀する詞にして、若、然の二字を、一句の上下におきて、うの事を形する字法あるへし、而るを、右のことくうつしては、これを俗言もて解せんよ、「何々ノヤウデアアル、ソウシヤ」といふでは、叶ふまじ、かくては、「ソウシヤ」の一語、更に用をまます、又助辭もたなく例は、

今之時、則易然

(孟子)

豈得無象之然乎

(韓文)

の如き類にて、この二個の然の字は、いはゆる焉の字と同様あり、故よ、孟子の趙註には、今時、易ミキ以
行チトキ王化者也と註せり、まして邦訓をつくるに於てをや、故にこれを意譯すれば、左のみとし、

今ハ實ニ王化ノ行ヒヤスキ時ナリ

豈コレニ似タル所アルマジクヤ

是れらも、世の學者をして、かゝしめずは、

今ノ時ハ則チヤスキトシカリ

豈ニ之ニカタトルコシカルナキチエンヤ

などいふへし、只句法のこちらたきのみならず、意味の齟齬すると、風馬牛あり、是をもて、東西の言語
は、そのまゝに用ふる時は、意味大にたがひ、これを換ふる時は、詞變して、意味同一に歸すといふと
をさとるへし、

○ナストシカラサルトあといふ事

是に大に語法に背きたる言さまあり、うは「ナス」の裏は「ナサ、ル」なり「ナス」の詞と、「シカラサ
ル」の詞とは、反對の詞にもあらず、表裏をあす詞にもあらず、「シカラサル」の表は、「シカル」あり、是
れらの詞は、皆反對表裏をなす詞を用ふべきなり、たとへは

學フド學ハマト

教フルト教ヘスト

善キト惡ロキト

強キト弱キト

の類あり、表の詞、異にして、裏の詞に、盡く「シカヲサル」の詞を用ふるとは、あるまじき事あり、その甚しきに至りては、漢文の否の字を、「イナ」と訓するより、遂にこれを濫用して、「スルトイナト云云」「學フトイナトニ由ル」などいふものあり、誠に滅法といふべきにや、「イナ」は、談話のうちかへしに用ふる詞にて、俗に云ふ「イヤ」あり、即、諾の反對にて、文言の裏をいふ詞にあらず、

さて此に言ふべきところあり、それは、邦語の格にては、「ト」文字の上は、皆切るゝ詞の居るが定法にして、つゞく詞を「ト」と擧ぐるは、皆その上に、名詞を省きたる格あり、それは「ト」文字は、もと接續詞にて、上につゞく詞あれば、この接續詞は、用なき事あり、切れたる故に、この詞を用ふる事あり、省ける方、はその繁を避くる事あり、即上文に引ける例のごときは是なり、「學フト學ハヌト」は、「學フ」「學ハヌ」の下に、何れも「モノ」「ユト」などの名詞を省けるなり、その次の三例も、皆しりり、右の法は、我邦固有の定法にして、俗言は、何れも、この格にたかはす然るよ、一たひ筆を用ふれば、忽然一變、例の誤點本を書下せよせるかごとき体を用ふるは、吾千思えて解せざる所あり、嗚乎、口には我々日本固有の語格を用ひながら、筆をとる時は、忽漢文直譯の体を用ひざるをぬすとは、何ろ煩をいとほざるの甚しきや、故に、吾常に云ふ、我か邦の人は、口上よ自由ありて、筆下に自由なきと、吾筆下に自由あらんとを學者に向つて望むあり、

クリミヤ戦争始末

廣田直三郎

緒 論

幸運の寵兒那翁は千八百十五年ウチーターマールーの大戦に敗れ大西洋の孤嶋に憂死しより歐洲の兵亂